

春節(正月)を祝う蛇踊り(龍舞)。後方は総統府(旧台湾総督府)



アジアと日本

石田 浩

「二十一世紀はアジアの世紀」と、よく囁かれる。アジア経済を日本が先導し、アジア NIES がこれに続き、アセアンと中国がその後を追っかけ、目覚ましい経済成長を遂げた。雁が空を列をなして飛ぶのと似ており、「雁行発展」と呼ばれている。低迷する世界経済の中でアジア独りが気を吐き、世界経済の比重はアジアにシフトしている。韓国・台湾・香港・シンガポールといった「四匹の小龍」の成長は著しく、前二者は日本を脅かすまでに成長し、後二者はイギリスを追い抜いた。日本とアジアとの経済交流は緊密さを増し、泉南沖に関西国際空港が開港し、南港にアジア太平洋トレードセンターが開設され、大阪がアジアへの表玄関になると期待されている。マスコミは挙ってアジア経済の興隆を取り上げ、日本人もそれを謳歌している。アジアの未来はそんなバラ色なのか。

昨年、ジャカルタで APEC が開催された。アジア外交にアメリカ人権外交のトーンは弱まり、日本は調整役と称して何ら積極的発言をしない。アジアの冷戦構造は存続し、南北朝鮮と中台の緊張だけでなく、領海や領土・民族紛争のきな臭さは残っている。アジアの権威主義体制は存続し、民主化を欧米価値観の押し付けと拒否する。また、工業化に伴う公害の発生、生態系の破壊、貧富の格差拡大、社会治安の乱れは目を覆うばかりで悲劇的だ。経済大国・日本の役割は大きい。一体何ができるのか。残念ながらも何もしない。何故か。それは過去の侵略や植民地支配を持ち出されれば沈黙し、金儲けに汲々とし、核実験や軍拡、人権抑圧を黙認してきた点からも窺える。特に、十二億人の巨大市場を持つ中国には頭が上らない。

日本は戦後反省を経済援助で誤魔化し、過去を持ち出されれば「謝罪」する、「有礼無体」(礼があるようで実体がない)に終始してきた。過去を反省するならば、五十年間植民地支配した台湾から始めるべきであり、その親日的感情に甘えてはいけない。韓国の金泳三大統領は戦後五十年を迎える来年までに、朝鮮総督府(現・国立中央博物館)の解体を決定したが、台湾では総督府を総統府として利用し、解体する意志がない。何故か。

台湾が経済成長を遂げ、民主化を進展させた結果、台湾への関心は高くなったが、日本の台湾無視と無知は一向に変わっていない。台湾の経済成長と民主化はアジア発展の試金石であり、台湾と日本との歴史的関係は深く、我々が台湾から学ぶ点は多い。今年には下関条約(台湾統治)百周年、戦後五十周年に当たる。過去の反省に立脚し、我々がアジアの安定と発展に貢献しようとするのであれば、アジアの国々と分け隔てなく対等平等に付き合ひ、平和外交を実践すべきである。いつまでも「有礼無体」であってはいけない。

(経済学部教授)



昨年秋、東北と首都圏で開催された学会に、相次いで出張した。事前に時刻表で経路をたどると、三陸は随分遠く、また交通機関の予約がうまくいかず、先行きが思いやられた。結局、仙台経由で飛行機から新幹線に乗り換え、駅からは主催者がバスを用意してくれたおかげで、自宅から七時間で会場の大船渡に到着することができた。他方、首都圏への出張は、困難を極めた。混雑による遅延と、接続の悪さが原因だった。自宅から横浜郊外の会場まで、結局六時間を要した。都市部の混雑による被害が、改めて証明された格好となった。

同時に、交通網の整備によって、物理的距離が容易に克服されることを実感させられた。昨年の関西国際空港の開港で、関西とアジアの往来は確実に便利になった。両者の距離は、時間的にも経済的にも一層縮まると期待される。しかし問題は、両者の心理的距離をどう縮めていくべきか、あるいはその距離を保持していくべきかである。物理的距離は近くても、心理的距離は遠い国もある。また、心理的距離は近いからといって近付きすぎると、互いに不幸を招くこともあるからである。それは、人間関係にもあてはまるだろう。(N・T)

HEADLINE

- 3 面 「学長15年を振り返って」
- 4・5 面 特集 世界の正月 私の初夢
- 6・7 面 経済学部・商学部のカリキュラム改正案
- 8 面 関大フォーラム「大学教育と試験」



関大フォーラム

大学教育と試験

試験の信頼性を高めるために

山本 繁綽

「試験の結果は、実力か運か、どちらか」と、手を挙げさせたら、大多数の学生が運の方に手を挙げた。教師はみな、大変な時間をかけて懸命に出題や採点をおこなっているのに、試験がキヤンパルの如きと思われる救われない。だがしかし。

第一、多くの文系の講義科目では、一年間の勉学の成果が、ただ一時間の試験で決まる。事務的な制約もあろうが、前期試験(Semester制の場合)は中間試験、を制度化するとか、せめて一時間半にするとか、もう少し試験に時間を

「試験の結果は、実力か運か、どちらか」と、手を挙げさせたら、大多数の学生が運の方に手を挙げた。教師はみな、大変な時間をかけて懸命に出題や採点をおこなっているのに、試験がキヤンパルの如きと思われる救われない。だがしかし。

第一、多くの文系の講義科目では、一年間の勉学の成果が、ただ一時間の試験で決まる。事務的な制約もあろうが、前期試験(Semester制の場合)は中間試験、を制度化するとか、せめて一時間半にするとか、もう少し試験に時間を

「試験の結果は、実力か運か、どちらか」と、手を挙げさせたら、大多数の学生が運の方に手を挙げた。教師はみな、大変な時間をかけて懸命に出題や採点をおこなっているのに、試験がキヤンパルの如きと思われる救われない。だがしかし。

第一、多くの文系の講義科目では、一年間の勉学の成果が、ただ一時間の試験で決まる。事務的な制約もあろうが、前期試験(Semester制の場合)は中間試験、を制度化するとか、せめて一時間半にするとか、もう少し試験に時間を

「試験の結果は、実力か運か、どちらか」と、手を挙げさせたら、大多数の学生が運の方に手を挙げた。教師はみな、大変な時間をかけて懸命に出題や採点をおこなっているのに、試験がキヤンパルの如きと思われる救われない。だがしかし。

第一、多くの文系の講義科目では、一年間の勉学の成果が、ただ一時間の試験で決まる。事務的な制約もあろうが、前期試験(Semester制の場合)は中間試験、を制度化するとか、せめて一時間半にするとか、もう少し試験に時間を

試験の学習の総決算

山名(岩田)年浩

「試験の結果は、実力か運か、どちらか」と、手を挙げさせたら、大多数の学生が運の方に手を挙げた。教師はみな、大変な時間をかけて懸命に出題や採点をおこなっているのに、試験がキヤンパルの如きと思われる救われない。だがしかし。

第一、多くの文系の講義科目では、一年間の勉学の成果が、ただ一時間の試験で決まる。事務的な制約もあろうが、前期試験(Semester制の場合)は中間試験、を制度化するとか、せめて一時間半にするとか、もう少し試験に時間を

新刊紹介

文学部教授 木下正俊 他編

文学部教授 神堀 忍 他編

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

文学部教授 伊地智均監修

その資料の博覧と鮮やかな立論は目覚ましいものがある。特に、検閲にパスしなかつた書物を売り歩いた男の足跡を追った研究や、書物の生産と普及のプロセスを検証した書物史研究など、文学研究にも示唆に富むものが多く、この刺激的な歴史書を流暢な日本語で読めるのは、じつに有難い。(樋口欣三)

名著教授 谷沢永一著
「司馬遼太郎の贈りもの」
PHP研究所 一五〇〇円

前著「円熟期 司馬遼太郎 エッセンス」(文芸春秋、一九八五年)で、長年温めてきた「司馬遼太郎について自分の存在」を書いた著者は「司馬遼太郎は、少なくとも私にとっては、始めて日本人の中に見出した最も包括的な人生の師であった」と述べている。私も三十年前に著者から司馬文学のすばらしさを教えられて以来、今日まで司馬遼太郎を人生の師と仰いできた人である。

本書は前作で触れえなかつた作品の一つに即して、該博な知識と、独自の視点にもとづく犀利な分析によって司馬文学の神髄を説き明かしたものである。読者の多くはこれを読んで、司馬文学のおもしろさを堪能することにも、それぞれの作品の底にひそめられた作家の思想を読みとることができようであろう。ともあれ、本書はわれわれ司馬文学ファンにとっても、これから司馬文学に親しもうとする者にとっても、この上ない「贈りもの」となるであろう。(松井武治)

経済学部専任講師 李英和著
「北朝鮮 秘密集会の夜」
クレスト社 一四〇〇円

いま注目のアジアの隣国、北朝鮮の表情を知るのに、これ以上の書物はない。なぞに包まれた独裁国への関心からでも、好奇心からでもよい。とにかく一読をおすすめする。初めは著者の留学の動機を含めて興味津津。そのうちに民主主義人民共和国の呼称と全く逆の見聞の連続に驚き、あきれる。やがて、深刻な思いにとらわれるようになる。悪い政治が極限に達すると、こんなことになるのか。その中で、生き抜いている庶民のたくましさ、反体制知識人の苦悩には感動を覚える。ここまで見抜き、ここまで表現できる力量は、著者のすぐれた資質によるものだが、在日朝鮮人三世にしてようやく成し得たというべきであろう。日本人としては、悲しいといつか、申しわけないといつか、複雑である。

遅かれ早かれ、北朝鮮の国家体制の崩壊は避けられないであろうが「政変の過程で、大混乱を私も恐れる。日本人も何かをなさねばならない」とは確かである。(小山正弘)

マックスウェル・マコムス
エドナ・フィン・セイデル共著
「ニューズ・メディア」と世論」
関西大学出版部 一五〇〇円

世論とニューズとの関係は、マス・コミュニケーション研究の重要なテーマの一つである。以前からマス・メディアの主要な機能の一つとして「環境監視機能」が指摘されてきたが、本書で取り上げられている「アジェンダ設定」も私たちの現実認識、とりわけ政治のそれと関係している。私たちが政治的な出来事や事件をマス・メディアからのニューズで知ることが日常になっている。社会的に何が重要で議論すべき争点(アジェンダ)なのかを認識する際、かなりの程度マス・メディアに依存した状況に置かれていると云ってよい。本書では、こうした社会的な争点化のメカニズムとそのニューズの働きに注目し、世論とニューズとの関係やアジェンダ設定に関するこれまでの研究成果が手際よくまとめられている。近年、メディアと政治との関係が再考を迫られている時であるだけに、研究者や学生だけでなく、広くマス・メディアに関心を寄せる人々には是非読んでもらいたい一冊である。訳者は、専門の立場から読みやすい丁寧な翻訳に努めている。(吉岡 至)

元工学部教授 三根 久
工学部専任講師 見市 晃 他著
現代応用数学講座4
「モンテカルロ法・シミュレーション」
コロナ社 三二二〇円

シミュレーションの分野は学問の必要性より、むしろ社会生活全般の要請から重宝がられ発達してきた。計算結果の信頼性は、いかに疎にして漏らさぬ簡潔なモデルに問題を構成し、計算機プログラムを組み込むかにかかっている。その点、応用数学シリーズの一環として出版された本書が公共性の高い領域を対象として、モデル化に力点を置いて書かれていることを高く評価したい。また、現象の再現性を保証するためのモンテカルロ法については、前半に詳しく述べられている。本書は複数の著者が得意の部門を担当して執筆されているが、編著者が全体の文章や体裁を統一しているのを読み易くなっている。昨夏の異常気象に関連して、地域水利用システムが洪水に対してどの程度の耐性があるか、またその信頼性をどのように評価すればよいかという章があるが、本書がもう少し早く上梓され洪水対策に活用されておれば、という行政担当者も多く、その点は惜しまれる。(中井輝久)



今月の表紙

石田 浩(いしだ・ひろし)教授 専門は中国農村経済研究で、中国や台湾・香港へたびたび実態調査に出かける行動派。近著に「わがまま研究者の中国奮戦記」など。

編集後記

本号では、前学長の在任十五年の回想記で伝えられる伝統の重みと、新たな大学教育改革の息吹を感じていただけたと思う。四・五面には特集で新年号らしき盛り込みだが、一面には「二一世紀のアジアの時代の幕開け」に向けて、日本の果たすべき役割を問い直すものである。一方、六・七面にはカリキュラム改正、経商合同ゼミナール大会の報告など、経済学部、商学部の試みを重点的に紹介した。同時に、関大フォーラムでは大学教育と試験の問題を扱い、大石を投げたつもりである。戦後五十年を迎える今年、平和の意味を再認識するために、世界各地でさまざまな行事が催されることであろう。年頭に際し、今も戦火が絶えない諸地域に一日も早く平和が訪れることを、心より祈りたい。(八島 記)